



# UTCMES ニュースレター

VOL.8 2016

1. 1月30日公開シンポジウム「移動・移民と中東」報告	1	(2) マウラーナー・アブルカラム・アーザード・アラブ・ベルシア研究所	
2. 講演会・ワークショップ報告記	2	(3) タジキスタンのゾロアスター教遺跡調査 (2015年)	
(1) Women and Politics in the Gulf		5. 中東地域のいま	8
(2) The Eastern Christian Tradition of Mysticism: From Evagrius to Barhebraeus		(1) パレスチナでの生活を通して	
(3) Approaches to the Politics and Political Economy of the Arab Gulf States		(2) カイロの“おしゃれクルアーン”	
(4) フナイン・イブン・イスハークによるアラビア語翻訳活動の実際: ガルノス「ヒポクラテス「箴言」注釈」アラビア語版の写本校訂を基に		6. 新刊紹介	11
3. 学会参加記	4	小笠原弘幸「イスラーム世界における王朝起源論の生成と変容」—古典期オスマン帝国の系譜伝承をめぐって」刀水書房, 2014年	
(1) 2015年度北米中東学会 (The Middle East Studies Association (MESA)) 年次大会参加報告		7. そのほかの便り	12
4. 研究案内	5	(1) 駒場博物館におけるオマーン展「Omani Corner at Komaba」の現在の展示について	
(1) ラスール・ジャアファリヤーンと新出史料「タタル・モンゴルの王たちの諸事蹟」		(2) 日本・オマーン協会大森敬治理事長の本センター訪問	
		(3) 齊藤貢在オマーン日本国特命全権大使の本センター訪問	
		8. スタッフ・発行情報	12

## 1. 1月30日公開シンポジウム「移動・移民と中東」報告

2011年「アラブの春」以降の中東地域での動乱は、シリア、イラク、リビアなどにおけるイスラーム国やそれに同調する勢力の台頭と内戦に帰結し、大量の移民や難民が発生し、周辺諸国のみならず、欧州などでも、さまざまな問題が起ころつつある。こうした現状を歴史的な視点も含めて議論すべく、2016年1月30日(土)午後、東京大学中東地域研究センターは、科学研究費基盤B「中東・北アフリカ地域のイスラーム圏の少数派と弱者に関する総合的研究」(研究代表者: 高橋英海)との共催で、「移動・移民と中東」と題する公開シンポジウムを開催した。登壇者と講演題目は以下の通りである(講演順)。

**近藤洋平** (東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・特任研究員)  
「初期イスラーム時代における人の移動と教義の伝播: イバード派の場合」

**菊地達也** (本学人文社会系研究科・准教授)  
「11世紀ドゥルーズ派の集団移動: エジプトからシリアへ」



**高橋英海** (本学総合文化研究科・教授)  
「中東地域のキリスト教徒にとっての移住: 聖書、歴史、そして現状から」

**辻上奈美江** (本学中東地域研究センター・特任准教授)  
「湾岸諸国への人口流入: 家事労働者の雇用と「人権」」

**黒木英充** (東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・教授)  
「近現代の歴史的シリアにおける人間移動と少数派」

第一部「前近代」において、まず、近藤洋平氏は、イスラームにおける少数派で独特の伝統を有するイバード派発生地の契機とその初期の発展を説明し、遊学、商業活動、巡礼などを通じて、人の移動と教義の伝播がなされたことを論じた。

続く菊地達也氏は、現在の中東で問題になっている「宗派」にも触れながら、ドゥルーズ派成立経緯、発展、教義の展開を論じ、エジプト起源の同派がシリアに移動して一定数の信徒を獲得したのちに、次第に閉鎖的な宗派となっていく過程を説明した。

第一部最後に登壇した高橋英海氏は、聖書における人の移動、中世における東方諸教会の拠点の移動を説明し、その上で、オスマン帝国末期第一次大戦中に、アルメニア人とシリア教徒が強制移住・虐殺の対象となったことを指摘し、現在のイラク、シリアで発生しているキリスト教徒に対する迫害



との類似性を論じた。

第二部「近代」において、辻上奈美江氏は、サウジアラビアを例に、家事労働者(いわゆるメイド)の受入国における社会的立場、国際情勢との関係、現地調査に基づく雇用者と家事労働者の権力関係や、家事労働者をめぐる言説を説明した。

最後に特別講演として、黒木英充氏は、歴史的シリアにおける人の移動の歴史を通観して、レバノンとシリアを比較しながら宗派問題を説明した。レバノンでは1864年以來「宗派体制」が成立し、15年の内戦を経た現在でも機能しており、この構造に対する批判も指摘された。続いて、レバノン系移民の世界的活躍を紹介し、商業分野での成功の要因を論じた。最後にシリア内戦の影響にも言及した。

質疑も、一神教による異教徒迫害の正当化議論を理論的に問うものや、イスラームの初期の拡大と人の移動に関するものなど、多岐に亘った。当初は積雪も予想され、悪天候ではあったが予想以上の参加者に恵まれ、非常に有意義な公開シンポジウムとなった。(文責: 阿部尚史)

## 2. 講演会・ワークショップ報告記

### (1) 特別講演会

#### “Women and Politics in the Gulf”

##### (湾岸における女性と政治)

日 時：2015年11月2日(月)

13:00-14:45

場 所：東京大学駒場キャンパス1号館  
105教室

講演者：ルチアーノ・ザッカラ

(カタール大学助教)

東京大学中東地域研究センターは、科学研究費基盤(B)「民主化プロセスにおける司法府の役割：中東イスラーム諸国の比較研究」(研究代表者：石黒大岳(アジア経済研究所))の招聘によって日本滞在中のルチアーノ・ザッカラ氏(カタール大学助教)を招き、“Women and Politics in the Gulf”と題する講演会を開催した。現在、カタール大学で教鞭をとるザッカラ氏は、カタール、サウジアラビア、オマーン、UAE、クウェイト、パフレンというGCC6カ国と、同じく湾岸に位置するイラク、イランにおける女性の政治進出の歴史的経緯および現状を、統計資料をもとに詳細に議論した。まずザッカラ氏は、各国の政治制度と選挙制度を歴史的な変遷から確認し、憲法上の女性の位置づけを説明した。イラクが部分的に民主的であるほか、7カ国はいずれも非民主的政体であり、カタール、オマーン、サウジアラビア、UAEでは、選挙が実施されたのは1999年以降と比較的最近の動きである。サウジアラビアは、2015年12月の選挙で初めて女性の投票権が認められることになっており、UAEでは男女ともに選挙に制限がある。興味深いのはイラクの事例である。イラクでは、2005年に制定された憲法によって、女性の議席が25パーセントは確保されているのである。こうした基礎的な情報を説明した上で、実際に各国において、女性がいつどのような大臣級の政治職に就任したか比較し、また議会に女性議員が占

める議席数とその比率を、国際的な順位の中なかで紹介した。議会における女性の比率は、上記の通り25パーセントを割り当てられているイラクで比較的高い(26.5パーセント)ほかに、サウジアラビアでは、国王による任命で20パーセントを占め、さらにUAE(17.5パーセント)も日本(9.5パーセント)よりも高いことが指摘された。また、いわゆるムスリムが多数を占める国として、トルコとパキスタンでは女性首相が生まれている。ただし、今回取り上げた8カ国についていえば、防衛大臣や財務大臣のような枢要な閣僚に就任している例はなく、教育大臣や厚生大臣のようなやや重要度が下がる大臣職に就任しているという。このほか、女性が選挙に立候補する割合が男性に比べて著しく低いことや、女性議員は、男性議員より職務における達成度や貢献度を厳しくチェックされていることも指摘された。

質疑においては、憲法等のアラビア語原文において、女性形と男性形がどのように使い分けられているのか、といった文法上の性を厳密に分けるアラビア語の特徴が憲法等の文章でどのように処理されているか問うものや、女性が首長になったことが、どれほど女性地位の向上(経済的な環境の向上)に寄与するものなのか、といった点が活発に議論された。統計上、湾岸諸国は女性の政治参加は現時点では十分とはいえないが、欧州の例などを見ると時間がかかると明らかであり、必ずしも悲観的に見る必要はないと締めくくられた。日本の位置とも比較することで湾岸諸国の現状をよりわかりやすく理解することができ、議論も活発に交わされ、非常に有意義な講演会となった。

### (2) 特別講演会

#### “The Eastern Christian Tradition of Mysticism: From Evagrius to Barhebraeus”

##### (東方キリスト教の神秘主義伝統： エヴァグリウスからバルヘブラエウス)

日 時：2015年11月18日(水)

17:00-18:30

場 所：東京大学駒場コラボレーション  
ルーム2



講演者：ジェニファー・グリッグス

(ロンドン大学東洋アフリカ学院  
SOAS)

東京大学中東地域研究センターは、科学研究費基盤(B)「中東・北アフリカ地域のイスラーム圏の少数派と弱者に関する総合的研究」(研究代表者：高橋英海)との共催で、日本滞在中のジェニファー・グリッグス氏(ロンドン大学東洋アフリカ学院 SOAS 研究員)を招き、“The Eastern Christian Tradition of Mysticism: From Evagrius to Barhebraeus”と題する講演会を開催した。バルヘブラエウスとガザーリーの神秘主義に関して研究しているグリッグス氏は、西洋近代的な人文科学研究の枠組みで、神秘主義体験をいかに説明するか、という挑戦的な論題について、バルヘブラエウス(1225/6~1286年)におもに焦点をあて、認識論的な見地から議論した。まず、ユダヤ教の神秘主義研究をはじめとする、神秘主義研究に関するこれまでの議論を整理し、20世紀の研究が現在の我々の神秘主義理解のあり方に決定的に影響を与えていることを指摘した。本講演でとりあつかう、「東方キリスト教における神秘主義」は、神秘主義研究と東方キリスト教伝統研究の双方にかかわる論題となる。その上で、グリッグス氏は、超越、精神性 spirituality、神の絶対性、神への愛といった議題が、バルヘブラエウスの著作『精霊の書』Book of the Doveでどのように論じられているのか説明し、バルヘブラエウスが、ギリシア哲学的な枠組みと神秘主義思想を両立させようとしていた知的営為を明らかにした。

質疑においては、バルヘブラエウスと同時代のイスラーム神秘主義思想家の関係や、バルヘブラエウスが非常に影響を受けたとされるガザーリーの思想をどのように発展させたのか、また「精霊」spiritというイスラーム思想ではあまり取り上げられないキリスト教に特有の議論の重要性や、バルヘブラエウスが司教であったことに由来する、記述の限界、4世紀の工



ヴァグリウスとバルヘブラエウスの比較などが話し合われた。講演自体は難解であったが、主催者と講演者以外にもシリア語・東方教会史の専門家が参加し、きわめて濃密な議論が交わされた。

### (3) 特別講演会

#### “Approaches to the Politics and Political Economy of the Arab Gulf States” (ペルシア湾岸諸国の政治と政治経済学を論じる)

日 時：2015年12月7日(月)  
13:00-14:45

場 所：東京大学駒場キャンパス1号館  
105教室

講演者：マシュー・グレイ  
(オーストラリア国立大学准教授)

東京大学中東地域研究センターは、在外研究のため、現在東京大学東洋文化研究所に滞在中である、オーストラリア国立大学のマシュー・グレイ氏を招き、“Approaches to the Politics and Political Economy of the Arab Gulf States”と題する講演会を開催した。今回の講演では、題目の通り、グレイ氏は、ペルシア湾岸のアラブ諸国(カタール、サウジアラビア、オマーン、UAE、クウェイト、パフレン)における政治と政治経済(political economy)の概要を、レンティア国家論、世襲とエリート政治、国家資本主義、国際関係論、実業家等の役割という6つの項目から論じた。まず、レンティア国家論にかんして、日本をはじめとした、国民の生産活動と所得に対する課税に基づく国家と、主として天然資源からの収入を国民に分配し、きわめて低いもしくは無税でさまざまなサービスを提供する国家を指すレンティア国家という二つの類型を概観した。また世襲的な国家体制をとくに、家産制と定義し、支配者の一族が国家と王朝政治を融合している点を論じた。続いて、国家資本主義として、グレイ氏は、特に国家・政府による中核企業(天然資源、石油化学、航空、港



湾事業)の所有を指摘した。ここで重要なのは、国家は3分の2程度の株式を保有し、残部を市場に上場している点であり、国際市場との関係性を一定程度保持していることである。国際関係論的観点からは、おもに、カタールとクウェイトの例を論じた。カタールについては、最近の同国の積極的な文化・外交政策を、カタールを再構築するreinvent野心的試みと述べた。一方クウェイトは、本来レントの分配により、国民の支持を得ているのであるが、イラクの脅威を前にして、国際的な支持を得るために民主的な選挙制度を構築しているという。最後に、サウジを例に、国内外の政治と社会の関係を論じ、法学者の取り込み、米国との関係、女性の権利向上などについても、注意深く政策を実施していることを指摘した。

質疑においては、湾岸地域の国家資本主義の特徴とそれ以外の国の事例(中国やブラジルなど)との比較や、レンティア国家論の理論的発展性、湾岸諸国の持続可能性などが議論された。

### (4) 特別講演会

#### 「フナイン・イブン・イスハークによるアラビア語翻訳活動の実際：ガレノス『ヒポクラテス「箴言」注釈』アラビア語版の写本校訂を基に」

日 時：2015年12月14日(月)  
18:00-19:30

場 所：東京大学駒場キャンパス18号館  
コラボレーションルーム3

講演者：三村太郎(マンチェスター大学)

東京大学中東地域研究センターは12月14日、マンチェスター大学でギリシア・アラビア科学史の研究を行っている三村太郎氏を招き、「フナイン・イブン・イスハークによるアラビア語活動の実際：ガレノス『ヒポクラテス「箴言」注釈』アラビア語版の写本校訂を基に」と題する講演会を開催した。三村氏は、ギリシア語からアラビア語への翻訳の実態を解明するために、それぞれ比較するに値する校訂テキストを作成する必要性を指摘した。そのために、現在、フナイン・イブン・イスハークが翻訳した、ガレノス『ヒポクラテス「箴言」注釈』を、7種のアラビア語写本を用いて校訂中であり、今回の報告はその作業の成果の一部となる。氏は、フナインのテキストの特徴、ギリシア語テキストとの比較を述べな



がら、9世紀アッバース朝治下におけるアラビア語翻訳のあり方をあわせて議論した。まず、もとのギリシア語テキスト校訂作業も現在進行していることを紹介し、そこで利用されているギリシア語写本が、13世紀以前にさかのぼらず、フナインが利用したと考えられるギリシア語写本は、おそらく6世紀頃のものとして推測されるため、フナインのアラビア語写本がギリシア語テキスト作成のうえでも参考になりうることを指摘した。こうした説明ののちに、三村氏は、フナイン訳のいくつかの箇所を具体的に取り上げ、現在刊行されているギリシア語テキストと比較し、どのような違いがあるか、異読の可能性、別の解釈の選択肢などについても詳しく解説した。氏によれば、フナイン訳の特徴として、アラビア語として意味が通るように注釈的解釈も含めて工夫されており、アッバース朝期の有力者や医師らの需要にこたえるかたちで、翻訳をおこなっていた実態が明らかになった。

質疑においては、フナインが本書を訳出した背景、シリア語テキストの介在の可能性や、フナインのギリシア語能力、フナインのテキストがどれほどギリシア語原典に忠実か、逐語訳との違い、フナインと息子イスハークの翻訳活動の差異、フナインの社会経済的背景(依頼者、謝金)、11世紀のビルーニーの情報源におけるギリシア語翻訳活動事業の成果の影響など多岐に亘り、専門的な見地からまた一般的な関心からも質問が寄せられた。参加者は、講演者ご本人と司会担当者を含めて27人にのぼり、こうした研究に対する関心の高さがうかがえた。

このほか、2015年9月14日(月)に、シャポー・タラーイー氏(ドイツ、ベルリン自由大学)とナウレス・アットー氏(イギリス、ケンブリッジ大学)を招き、“Iraq and Syria: the Current Situation of Christians in the Middle East”と題する特別講演会を開催した。

(文責：阿部尚史)

### 3. 学会参加記



#### 2015年度北米中東学会 (The Middle East Studies Association (MESA)) 年次大会参加報告

(日本学術振興会特別研究員 (PD))  
岩本佳子

2015年11月21日から24日の4日間にわたり、アメリカ合衆国コロラド州デンバー市のSheraton Denver Downtown Hotelにて、第49回北米中東学会年次大会 (Middle East Studies Association/MESA Annual Meeting) が開催された。報告者はオスマン朝史を専攻する研究者であり、オスマン朝に関するパネルを中心に上記大会に4日間参加した。この場を借りてその簡単な報告を行う。

期間中は連日、会場となったホテルのコンベンション用フロアを貸しきって、朝8時半から夕方19時、日によっては21時まで研究発表を中心に、MESAが主催する各研究賞の表彰式、MESA年次大会を協賛した各種学術団体の集会、E. J. Brill, Cambridge Univ. Pressといった学術出版社のブースが立ち並びブックフェア、フィルム上映に至るまで様々なイベントが行われた。オスマン朝に関する報告のみに絞ったとしても、連日、朝から夕方まで発表が目白押しであった。地域は東南アジアから北アフリカさらには現代の欧米におけるムスリムに至るまでの思想、歴史、文学、地域研究に関する様々な発表が連日行われており、中東研究の現代における一大拠点である北米の層の厚さを痛感した。

年次大会の開催中は、会場となったホテルのロビーやパネルの会場で研究者間の活発な交流が行われた。本大会は北米を中心とした欧米の研究者の同窓会および交流の場という性格が強く、各パネルでは、博士課程の学生、ポスドクから著書を数冊出している重鎮まで幅広い発表が行われた。また、大会2日目の日曜の夕刻からは

MESAの全体講演として「中東における高等教育の将来 (The Future of Higher Education in the Middle East)」と題しての基調講演、緊迫する中東情勢や中東各国における学問の自由に関するアピールが学会名で採択された。その後、各研究賞の授賞式となり、深夜1時まで中東音楽をアレンジした音楽をDJがかけるダンスパーティーが、懇親会も兼ねて開催された。

4日間の会期中には、総計208のパネルが生まれ、平均して一つのパネルに4-5の発表があったために、全体では千近い発表が行われたことになる。さらに、大会初日には、中東研究に関する北米の組織の年次集会、論文誌の編集会議が開催されていた。3日目23日2時半から行われたパネルの一覧を以下に示すが、これをご覧いただければその多様な内容の一環がご理解いただけるかと思う。

- ・ Population-Based Survey Experiments in the Middle East
- ・ Mobilizing Against Sexual Harassment in Egypt: Reconfiguring Public Space and Social Responsibility
- ・ Concealment and Manifestation: A Reappraisal of Ghayba and Satr in Shi'i History
- ・ Anthropology of Hope and the Futures of the Middle East, part II
- ・ Elites, State Formation, and Post-Colonial Politics in Algeria
- ・ A Birds Eye of View on Code Switching in Modern Arabic
- ・ Narrative, Nationalism, and the modern Middle Eastern State
- ・ Theater of Loss: Trauma in Modern and Contemporary Arabic Drama
- ・ Interpretation and Practice of Maliki Law in the Islamic West
- ・ MENA Middle Class Report: Analysis and Critique
- ・ Local Sources on the Religious History of Central Asia from the Fifteenth to the Nineteenth Century



- ・ Orientalisms from the Periphery
- ・ The Maturation of the Turkish Republic
- ・ The Environment: Urban and Rural Biospheres
- ・ Structures and Transformations of Political Economy
- ・ The Islamic State: Regional Implications, Propaganda, Practice, Persecution
- ・ Perceptions of Culture and Society in the Ottoman Period
- ・ Language Politics: Liturgy, Discourse, and Space
- ・ Current Events Session: The Conflict in Syria

残念ながら、他の国際学会と比較すると点数は少ないとはいえ、予定されていた発表の取り下げ、発表者やチェアの遅刻や欠席、チェアが大会1ヶ月前に提出したフルペーパーを発表者に代わって読み上げて対応することも見られた。

年次大会には、中東研究の一大拠点である北米 欧米、留学生を中心に中東諸国の人々、スカーフを被ったムスリマの姿も見られた。女性研究者の姿も多く見られ、中には発表者全員もしくはほとんどが女性というパネルもいくつもあった。日本からは、私を含めて数人の研究者が参加し、研究発表を行った。私が出席したオスマン朝に関するパネルに限っても、オスマン、サファヴィー、ムガル朝という近世イスラーム帝国の比較や、シャリーア法廷、オスマン朝におけるウラマーとスンナ派、ジェンダーや女性史など研究の「流行」は当然ながら、日本と共通しており、日本人研究者も、英語で海外の学会で研究成果を発信していくことの重要性を感じさせた。

なお、2016年に開催される次回の50周年記念MESA年次大会は、ボストンのBoston Marriot Copley Placeで行われることが会場で発表された。非会員であっても年次大会参加用の一年間のみの特別会員資格を取得すればMESAの場で発表を行うことが可能である。詳しくはMESAのウェブサイトの年次大会に関するページを参照されたい。(http://mesana.org/)

## 4. 研究案内

### (1) ラスール・ジャアファリヤーンと新出史料『タタル・モンゴルの王たちの諸事蹟』

東京大学大学院人文社会系研究科  
アジア文化研究専攻博士課程  
水上 遼

イランのヒジュラ太陽暦1394年(西暦2015年から16年にあたる。以下年代表記に関しては断りがない限りイラン太陽暦とする)には、イランではモンゴル・イルハン朝関連の史料の校訂・出版が相次いだ。まず、ハーシム・ラジャブザーデ氏により、『集史』の編纂者として名高いラシードディーン・ファドルッラーの神学著作3作品(*Laṭāyif al-ḥaqāyiq*, *Tawdīḥāt-e rashīdī*, *Mabāḥith-e sultāniye*)の校訂が出版され話題を呼んだ。また、ムハンマド・ロウシャン氏によって、ハムドゥッラー・ムスタウフィーの『選史 *Tārikh-e guzīde*』の新たな校訂が2巻本で出版された。こうしたモンゴル・イルハン朝期の新校訂史料のなかでも、新出史料の校訂であるという点で特に注目し得るのがラスール・ジャアファリヤーン氏の校訂による『タタル・モンゴルの王たちの諸事蹟』(以下『諸事蹟』とする)である(Husayn b. 'Alī Baṭīṭī, *Aḥwāl mulūk al-Tatār al-Mughūl: Risāre dar aḥwāl-e Mughūlān wa suqūt-e Baghdād*, ed. by Rasūl Ja'fariyān, Qum: Nashr-e Muwarrikh, 1394)。本稿ではこの『諸事蹟』について、校訂者であるジャアファリヤーン氏の来歴と併せて紹介することにした。

ジャアファリヤーン氏はテヘラン大学人文科学部歴史学科の教授であり、イスラーム史を専門としている。筆者は2014年7月からテヘラン大学に留学し、ジャアファリヤーン氏のもとで学んでいるが、氏のゼミにはイラン国内の学生のみならず、アフガニスタン、インド、パキスタン、トルコなどから留学生が集まっている。また、ジャアファリヤーン氏は、かつてイスラーム議会図書館の館長をつとめ、組織改革を断行し、写本の利用・公開といった環境を整備した人物としても知られる。ゴムには氏の私設図書館である「イスラーム・イラン史専門図書館(Kitābkhāne-ye takhaṣṣuṣī-ye tārikh-e Islām wa Irān)」があり、イラン

のみならずアラブ諸国や欧米で出版された文献も積極的に収集されている。

氏の著作・史料の校訂は数多く出版されているが、代表的なものとしては、サファヴィー朝期のイスラーム、シーア派の変容を論じた『サファヴィー朝期の政治と文化 (*Siyāsāt wa farhang-e rūzqār-e Ṣafawī*)』(1388)、シーア派第3代イマームの追悼行事であるアーシューラーの歴史的展開を示した『アーシューラー運動の考察 (*Ta'ammulī nahḍat-e 'Āshūrā*)』(1391)、イスラーム史研究において重要な歴史家・ウラマーに関する情報をまとめた『イスラーム史の諸史料 (*Manābī'-e tārikh-e Islām*)』(1393)などを挙げることができる。さらに、ジャアファリヤーン氏が過去に書いた論文をまとめた『歴史論文集 (*Maqālāt wa risālat-e tārikhī*)』は、1393年に第二巻が出版された。また、史料の校訂としては、ヒジュラ暦700年頃のシーア派学者による預言者一族賛美の書『使徒の御家の人々の諸美德と純潔者の子孫の諸美質 (*Faḍā'il-e ahl-e bayt-e Rasūl wa manāqib-e awlād-e Batūl*)』、ヒジュラ暦6世紀にペルシャ語で書かれたメッカ巡礼記『諸儀礼・諸作法に関する参列者と旅人のための諸言及の機微 (*Laṭāyif al-adhkār lil-ḥuḍḍār wa-l-suffār fī al-manāsik wa-l-ādāb*)』(1392)などが近年出版された。

このように、ジャアファリヤーン氏の研究対象は、時代・テーマともに非常に幅広い。氏はイランにおける歴史研究の中心人物であるだけでなく、現在のイスラーム史研究を担っている世界的人物の一人と言って過言ではないだろう。また、近年ジャアファリヤーン氏が関心を寄せている研究テーマの一つに、イスラームにおける「分派学」の歴史がある。氏はテヘラン大学において、まさに「分派学 (*Milal wa niḥal*)」という名前の、博士課程向けのゼミを開講している。こうした関心は、後述の『諸事蹟』の校訂にもつながっていると言える。

次に、ジャアファリヤーン氏の校訂した『諸事蹟』の紹介に移る。なお、本稿の内容はジャアファリヤーン氏による史料解題に基づいている。『諸事蹟』は、バグダード陥落の2年後にあたるヒジュラ暦658



年、フサイン・アリー・パティーティーによって、マーザンダラーンとホラーサーンの境界にある都市アスタラーバードで著されたとされる文献である。本書は独立した著作ではなく、ムハンマド・フサイン・ブン・ハサン・アービー・ラーズィーによってヒジュラ暦630年にシーラズで著された、ペルシャ語の分派学書『人類の諸言説に関する諸学の解説 (*Tabṣīrat al-'ulūm fī maqālāt al-anām*)』を、上述のパティーティーがアラビア語訳した際に書き加えた一章である。また、ラーズィーの分派学書は本来26章からなるが、パティーティーはそのところどころに独自の文章を書き加え、さらに新たに『諸事蹟』にあたる27章目を自身で書き加えた。従って、26章までは基本的にもとの分派学書のアラビア語訳であるが、27章はパティーティーのオリジナルの作品であると言える。ジャアファリヤーン氏が本書の校訂のために使用したのは、イランの上院図書館(Kitābkhāne-ye majlis-e sinā)に所蔵されている、ヒジュラ暦898年に書写された写本である。

『諸事蹟』冒頭では、パティーティーがモンゴルに関する情報を知った経緯が記されている。それによれば、パティーティーにモンゴルの情報を伝えたのは、アミーヌッディーン・ムハンマド・ブン・アミールカーン・アスタラーバーディーなる人物であり、この人物はモンゴル帝国の中心的都市カラコルムにおいて、モンゴル王族に近かったムハンマド・アル=ハッファーフなる人物からモンゴルに関する話を聞いた。本文の内容はチンギス・ハーンの即位からバグダードの陥落とモンゴル軍の入城までを含んでいるが、これらの情報の内、どこまでがパティーティー自身の経験に基づくもので、どこからが他者からの伝聞に基づくものであるのかは明らかではない。

『諸事蹟』は、イルハン朝の最初期という執筆の年代や、アスタラーバードという、バグダードやタブリーズといったイルハン朝の活動・支配の中心から離れた地域という執筆地、さらには分派学書の一部に組み込まれたという点においても、非常に特殊

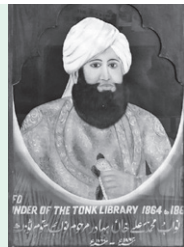
な成立背景を持つ。一方で、ヒジュラ暦9世紀末以前の『諸事蹟』の写本が残っていないことなどから、本書が果たしてヒジュラ暦658年に書かれたものであると確定できるのかという問題は残る。また、著者のパティーティーがどのような立場の人物で、どのようにしてモンゴル宮廷や征服地の情報を得ていたのかに関して不明な点が多い。こうした問題についての史料論的検討の必要性は残されているものの、モンゴル帝国の拡大とイルハン朝の成立、イラン高原の人々のモンゴルへのまなざしといった問題を含む本書は、今後多くの研究者によって参照されていくだろう。

## (2) マウラーナー・アブルカラム・アザード・アラブ・ペルシア研究所

東京大学大学院人文社会系研究科  
アジア文化研究専攻東洋史学講座助教  
大塚 修

本稿は、ペルシア語写本研究の発展に貢献するために、イラン史研究者の間ではほとんど知られてこなかった、インド・ラージャスターン州トーンク市にある「マウラーナー・アブルカラム・アザード・アラブ・ペルシア研究所 Maulana Abul Kalam Azad Arabic and Persian Research Institute」(以下APRI)の沿革と利用方法を紹介することを目的とする。

筆者がAPRIの存在を知ったのは、今からおよそ10年前、大学院博士課程に進学して間もない頃のことであった。当時行きつけだった神保町の某輸入書籍専門店で書棚を眺めていたところ、「インドで出版されたペルシア語写本目録を一揃い取り寄せたのだが、注文がキャンセルになり困っている。安くするので買い取って欲しくないか」という趣旨の売込みがあった。その大部分が、有名なホダー・バフシュ東洋公立図書館(ビハール州パトナ市)の写本目録であったため、その場で即購入したが、その中にAPRIの写本目録が偶然混ざっていたのである。目録を確認した筆者は、APRIの写本コレクションが質・量ともに素晴らしいものであることを知り、漠然とこの研究所に興味を抱くようになった。その後、事あるごとに国内外の同業者がこの研究所の話をついてみたが、インド史研究者からもこの研究所を利用したという返事が得られたことはなく、調査をしてみたいとい



▲トーンク藩王国3代目藩王  
ムハンマド・アリー・ハーン

う思いはますます強くなっていった。調査する必要性のある写本が幾つか所蔵されていたこともあり、2015年8月、遂に念願であったAPRIにおける写本調査を行うことができた。以下は、その調査に基づく、一人のイラン史研究者の視点によるAPRIの紹介である。APRIの沿革については、Abdul Lateef Usta, *Arabic Persian Research Institute Tonk*, Delhi, 2008; Sahibzadah Abdul Moid Khan, *35 Glorious Years of the Rajasthan Maulana Abul Kalam Azad Arabic Persian Research Institute*, Tonk, 2014を参照した。なおこの調査の際には、インド史を専門とする小倉智史さん(日本学術振興会・特別研究員)に大変お世話になった。心から謝意を表したい。

APRIは1978年12月4日に設立された、ラージャスターン州政府の管轄下にある研究所である。一見歴史の浅い研究所のように見えるが、その前身となったのはトーンク藩王国の図書館で、その中核となる蔵書を収集したのは、第3代君主ムハンマド・アリー・ハーン(在位1864-1867)であった。現在では、これにラージャスターン州の各都市(ジャイプル、ウダイプル、アルワル、バラトプル、ジャーラーワールなど)に伝存していた蔵書が加えられ、かなり大きなコレクションを形成している(アラビア語・ペルシア語・ウルドゥー語写本8,658点、勅令722点、シャリーア法廷文書65,000点など)。ムガル朝の宮廷図書館から流れてきた蔵書も多く、中には豪華装飾写本もある。蔵書以外にも、絵画、工芸品、貨幣など藩王国の旧所有物が所蔵されており、館内の展示スペースではその一部が展示されている。

APRIの連絡先は以下の通り。住所: Tonk 304001, Rajasthan, India、電話: +91-1432-247389、メール: maapri-rj@nic.in、WEBサイト: <http://maapritonk.nic.in/>。APRIのあるトーンク市はラージャスターン州の州都ジャイプルの南約100キロに位置する町で、町への公共交通機関はバスに限られている(ジャイプルから所要約3時間)。APRIはトーンク市バスター

ミナルのすぐ側にあり、アクセスは容易である。町の中心部から少し遠いが、徒歩圏内にホテルやレストランもある(APRI内にはゲストハウスもあるらしいが詳細については未確認)。

開館時間は9時~18時、休館日は土日祝日ということだが、一般の利用者がほとんど訪れない研究所であるため、事前に訪問日を通知しておく方が無難だろう(ただしメールの返事は遅く、筆者の場合確認が取れるまでに約40日間を要した)。写本を閲覧するためには、パスポートと所属機関からの紹介状(英文も可)を提示するだけでよい。閲覧許可をもらった後、2階にある写本閲覧室で請求フォームに必要事項を記入し提出すると写本が出納される。1回の出納は5点までが原則とのことだが、比較的融通はきく。担当者にもよるが、館内ではペルシア語と英語も通じるので、インド・プロパーでなくとも意思疎通に困ることはない。注意したいのは、閲覧室に写本目録が備え付けられていない点で、事前に写本目録で写本の書架番号を調べておくこと無駄な時間を浪費せずに済む。刊行されているペルシア語写本目録は、全3巻からなる歴史書写本の目録(Shaukat Ali Khan, *A Descriptive Catalogue of the Persian Manuscripts: History, Biography, Geography, Topography, Cosmography, Travel*, Vol. 1, Tonk, 1987; Abdul Moid Khan & Iftikharunnisa, *A Descriptive Catalogue of the Persian Manuscripts: History*, Vol. 2, Tonk, 1996; Abdul Moid Khan & Iftikharunnisa, *A Descriptive Catalogue of the Persian Manuscripts: History of India*, Vol. 3, Tonk, 2006)と全ペルシア語写本の書架番号が掲載されている簡易目録(Sahibzadah Muhammad Abdul Moid Khan, *A Hand List of the Persian Manuscripts*, Tonk, 2012)であり、書籍部で購入可能。写本の複写については、全頁数の3分の1までデジカメ撮影が可能で、費用は1頁2ルピー(約4円)。撮影した頁数を自己申告し、金額を支払う。

APRIのペルシア語写本目録の第1巻



▲APRI外観

が出版されたのは1987年のことである。そのため、現在でも頻繁に参照される。1972年に出版された包括的なペルシア語文献目録 Yu. E. Bregel, *Persidskaia Literatura*, 3 vols., Moscow ではAPRI所蔵の写本は紹介されておらず、このコレクションの存在は注目されてこなかった。しかし、ペルシア語写本の総数が4,225点にも及ぶことに鑑みれば、今後その存在を無視することは決してできないだろう。また、筆者の写本調査の結果、Udaipūr 2588という書架番号で登録されている『チンギス・ハーン諸子息の書 *Awlād-nāma-yi Chingiz Khān*』という題名の作品の写本が、『集史 *Jāmi' al-Tawārikh*』の写本であることが判明するなど、各分野の研究者が本格的な調査を行えば、まだまだ新しい発見が期待される。インドやイランの図書館に所蔵される写本の目録化が進む現在、上述のプレーゲルによる40年以上前のペルシア語文献目録の情報はやや古くなりつつある。今後は、APRIのような「新興の」研究所の写本も射程に収めつつ研究を進めていく必要があるし、その中で今後注目すべき写本コレクションの一つであることは間違いないだろう。かくいう筆者も本屋における偶然の出会いがなければAPRIの存在を知らないままだった可能性が高い。この出会いに感謝しつつ筆を擱きたい。

付記：本稿は日本学術振興会科学研究費補助金・研究活動スタート支援（課題番号26884016）による研究成果の一部である。また掲載写真は全て筆者による撮影である。

### (3) タジキスタンのゾロアスター教遺跡調査（2015年）

東京大学大学院総合文化研究科  
学術研究員  
青木 健

昨年引き続き、筆者は2015年9月にタジキスタンを訪れ、嘗てシルクロードの民として名を馳せたソグド人たちのゾロアスター教遺跡の調査に従事した。昨年の調査については、「中東地域研究ニュースレター Vol.7, 2015」のpp. 8-9を参照して頂きたい。それを承ける本稿では、1. タジキスタンの首都ドシャンベにあるタジキスタン考古学博物館で得た知見と、2. ザラフシャン渓谷にあるムグ山で得た

知見の2つに絞って紹介したい。

\* \* \*

1. タジキスタン考古学博物館では、タジク国立大学の博士課程の院生であるカミーラ・マジヌーノヴァさんのご案内で、イスラーム以前のゾロアスター教関連の出土品を見学した。因みに、マジヌーノヴァさんはパミール高原出身のイスマール派イスラーム教徒とのことで、これはこれで筆者の興味関心を惹いたが、彼女から得られたイスマール派情報については割愛する。

タジキスタン考古学博物館で最も興味深かったのは、ザラフシャン渓谷の中心都市アイニー（人口1万2千人）から出土した神像と、それが携えている拝火壇であった。と言うのも、近年のイラン高原出土のゾロアスター教遺跡に関する考古学的知見の進展は著しく、以前はゾロアスター教拝火壇であるとされていた遺跡の多くが、実はそうではなかったとの結論に反転しているのである。例えば、スイースターン州のダハーネ・ゴラーマーン遺跡には、アケメネス朝以前の拝火壇が集中的に造営されていると考えられており、筆者も『ゾロアスター教の興亡』（刀水書房、2007年）の中でそのように記述した。しかし、現在では、それらは魚を燻製にする為の竈が集中的に造営されていた「燻製工房遺跡」であることが判明しており、この地域で早くからゾロアスター教が信仰されていたという主張の論拠の一角が崩れるに至っている。また、ナクシェ・ロスタムの2基組み「サーサーン朝期拝火壇遺跡」は、しばしばその写真がゾロアスター教概説書や古代ペルシア概説書などに引用されるほど著名な「拝火壇遺跡」であった。しかし、これも現在では葬送儀礼用の「遺骨乾燥台」とあると判明してしまい、ゾロアスター教研究者の間に大きな衝撃を与えた。

このように、イラン高原で発見されていた「固定型の拝火壇」の多くが、実は拝火壇ではなかったとされている研究の現状にあって、中央アジアの山間部で「拝火壇」が出土していたとの情報には大きな意味がある。マジヌーノヴァさんの解説を借用すると、神像自体はミトラ神を模したもので、その左手には聖火を灯すための「小型拝火壇」を所持していた。仮にこの説が正しいとすると、中央アジアのソグド系ゾロアスター教徒たちは、嘗てイラン高原で一般的だとされていた固定型の拝火壇ではなく、



▲2015年初冠雪のザラフシャン山脈

移動型の拝火壇を所持していたことになる。また、筆者はウズベキスタンのターシケントにあるハムザ考古学研究所でも、ダル・ヴェルズィン・テペ出土とされる同様の拝火壇を実見したことがある。おそらく中央アジアのソグド人ゾロアスター教徒は、イラン高原のイラン人ゾロアスター教徒とは別趣の構造の拝火壇を採用しており、両者を分けるポイントの一つは、移動可能型か固定型かにあるのではないだろうか。

\* \* \*

2. ドシャンベからアンザーブ峠でザラフシャン山脈を越えると、西流するザラフシャン川との交差点に上述のアイニーの街がある。2015年は例年より早い9月20日にザラフシャン山脈が初冠雪し、標高3000メートル以上付近で草を食んでいた羊たちの下山が間に合わず、羊飼いたちが難渋していた。石炭産業の街アイニーからは、ひっきりなしに石炭を満載したトラックが首都ドシャンベを目指しているため、下山途中の羊の群れとトラック群が交差して、ちょっとした交通渋滞を引き起こしていた。

このアイニー市から更に西へ2時間ほど進んだ地点に、ムグ山がある。去年はザラフシャン川の対岸から見上げただけだったが、今年は登頂を試みる積りである。しかし、対岸から若干下流に架かった橋を渡って、ムグ山側の南斜面に取り付くだけでも一苦労であった。流石にサマルカンドとベンジケントに居たソグド王デーヴァシュティチが最後に逃げ込んだ山寨だけあって、難攻不落の構えである。そこから更に車で山道を登坂していくと、驚いたことにムグ山の上にはクム村なる村落の他、幾つかの村落が点在していることが分かった。下から見ただけでは、対岸の街道から「ムグ山」と呼んでいた部分が本丸のように思えたが、あそこは単に街道を覗くための出丸に過ぎないようである。「ムグ山要塞」とは、実際にはその裏に生活基盤を支える村落群を擁した複合的な要塞&生活コンプレックスなのである。

しかし、「ムグ山文書」が発見されたのはその「出丸部分」である。多分、ここが宝物

庫を兼ねていたのであろうから、山頂の村落群だけを見ていると仕方ない。だが、村落群から「出丸部分」までは大変な難路だった。地元の小学校教師ムラード氏の案内を受けて歩きだしたものの、徐々に道幅は狭くなり、ものの5分もしないうちに、断崖絶壁に張り付くようにして進まねばならなくなった。人間の二足歩行と云うよりは、壁を這う蜘蛛の如しである。でも、人間の足は8本ではなく2本だけなので、やっぱり不安定である。しかも、人間が歩ける部分の幅は僅かに30センチ程度しかない。筆者は岩肌にへばりついて横歩きしているうちに、服の右胸部分を岩肌に擦って破いてしまったので、これ以上は危険だと判断して300メートル先に「出丸部分」を望みつつリタイアした。しかし、ガイドによると、そもそも筆者が休憩しようとした箇所では落石があって危険だから、誘導された歩幅20センチくらいの箇所で爪先立ちで「休憩」することになった。生きた心地がしないとはこのことで、見下ろせば途中に灌木も何も無い。ここで大風が吹いたら、数百メートル下のザラフシャン川まで真逆さまでである。

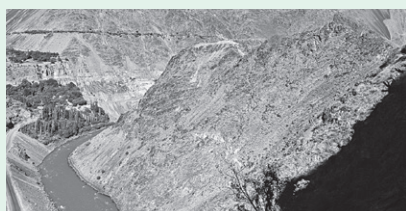
一方、案内のムラード氏と他のメンバーは、勇敢にもまだ先へ進むと云う。羊腸の小径に慣れている地元民はともかく、日本人メンバーは天晴れである。私は役立たずのような気がしたので、待っている間に高度計を用いて緯度と経度を図ったところでは、

北緯 39.114

東経 68.4219

海拔高度 1,869メートル

とのデータが得られた。10分ほど待っていると、他のメンバーも引き返してきた。この先の道は3箇所ですく崩落しており、とても飛び越えられる距離ではなかったとのこと。また、数ヶ月前にアメリカの調査チームがここにやってきて、どのような手段を用いたのかあの出丸部分に到達し、陶器の破片などの考古学遺物を運び去ったと聞いた。ムグ・クム複合コンプレックス全体はともかく、狭義のムグ山(=「出丸部分」)には、これ以上何も考古学的な遺跡は残されていないと考えた方が良さそうである。



▲ムグ山の「出丸部分」とザラフシャン川

## 5. 中東地域のいま

### (1) パレスチナでの生活を通して

東京大学文学部歴史文化学科  
学部学生  
田中雅人

#### 留学の経緯

文学部東洋史学専修に所属し、主に中東地域の近代史を学ぶ筆者は、2015年9月より1年間休学を申請し、現在パレスチナ西岸自治区のナブルスにあるアン＝ナジャーハ大学でアラビア語を学んでいる。

もとより長期滞在を通じて、文献やメディアからだけではなく直接現地を目で見て知りたいと考えていたが、そうした中で縁があったのが現在留学しているアン＝ナジャーハ大学だ。知り合いの社会人の方の紹介で、この大学への留学生派遣の斡旋を今年から始めようとしている会社があるということだった。東大がアラブ圏の大学と交換留学協定を持っていないこともあり、縁とめぐり合わせでパレスチナに約1年間休学留学することになったのだった。本科への留学ではなく、当該大学のアラビア語教育プログラムへの留学という形をとっており、授業ではジャーヒリーヤ時代から現代に至るまでのアラブ文学、パレスチナ方言、メディアや時事問題を素材にアラビア語を学ぶことができる。

#### パレスチナの治安

まず多くの読者の方が気にされるだろうパレスチナ西岸自治区の治安に関してだが、大きく分けて一般犯罪と政治情勢の二つの面から考察してみたい。

まず一般犯罪についてだが、西岸自治区に関しては大体の場所は安全と言える。統計などで調べたことはないが、生活実感から言って窃盗や強盗、詐欺などの犯罪は非常に少ないように思う。その要因として考えられるのがパレスチナ社会で保たれている強固な地域コミュニティだ。例えば私の住むナブルスは西岸地区の中では、南部のヘブロンに次ぐ第二番目に大きな都市で、およそ17万人(東京都台東区ほど)が暮らす。決して小さな田舎町ではないナブルスでさえ、近所同士が家族関係や各世

帯あたりの人数までも事細かに把握していることは珍しくない。

実際、私が現在の住まいに引越しをした際も、私の名前、ナブルスの大学でアラビア語を勉強していること、同居人の数と国籍くらいまでの基本情報は一週間ほどで近所中に知れ渡ったほどだ。朝近所のパン屋に買い物に行くまでの数十メートルの間に、近所のおじさん数人に「おーい調子はどうだ?」と大声で話しかけられるのはいつものことで、3分で終わるはずの買い物途中の道での立ち話で20分かかるとも日常茶飯事だ。

では政治情勢に関してはどうか。直近でも2015年10月以降、パレスチナ人によるユダヤ人入植者や兵士を狙ったナイフによる殺傷事件がイスラエル・パレスチナ各地で発生、これに対して西岸地区ではユダヤ人入植者による報復的暴力行為が続いており、情勢悪化が報じられている。現地アラビア語紙の一部では、この一連の暴力の連鎖は「ナイフのインティファダ」「アル・クドゥス・インティファダ」と呼称されている。

こうした一連の殺傷事件に呼応して、西岸地区でも容疑者捜索を名目にイスラエル軍による都市間の交通の一時的な封鎖もしばしば発生しており、ナブルスに通じる全ての幹線道路が封鎖される事態も2015年10月から12月現在までに数度あった。また深夜にイスラエル兵が「国防上の理由」で市街地に侵入し、報復措置としての家屋破壊や、法的手続きなしの勾留・逮捕などを行ったりする頻度も2015年10月以降各地で増え、実際にナ



▲サマリア博物館館長、兼司祭のフセイニー・アル・カーハン氏と筆者。



ブルスでも市街地周辺部で少なくとも4軒の家屋破壊があり、他にも多くの逮捕や勾留措置が執られた。

このような不安定な政治情勢が存在する一方で、西岸全体としての治安は依然として安定しているように感じる。というのも、第一に今回の一連の事件は個人によるものがほとんどで、政治運動として地域規模では起こっておらず、衝突や家屋破壊なども極めて局所的なためだ。また第二にイスラエル兵による交通網の封鎖や入植者による暴力、市街地への夜間の侵入などの影響は、ナブルスなど主要都市内部にはおよびにくいということも、生活実感と報道のズレの要因と言える。そして第三に自分が日本のパスポートを持っているということも、検問などでは優位に働くことが多く、外国人であるがゆえの安全を享受しているという側面も大いにある。

自治区とはいえども、ほとんどの地域はイスラエル軍が治安権を握っており、パレスチナ自治政府 (Palestinian Authority、以下PA) の治安部隊もイスラエル軍との協力体制を敷いている。こうした「共同管理」のもとで、西岸地区でパレスチナ人の武装集団が力を持つことは困難であり、結果的に占領下での安定した治安といういびつな現実に帰結しているとも言えるのではないだろうか。

### パレスチナ内部に走る断層：難民キャンプと少数宗派コミュニティ

以上のようなイスラエル政府やユダヤ人入植者による暴力的措置は日本や欧米のメディアではあまり多くは報じられないものの、パレスチナ現地メディアでは頻繁に報じられる。その一方で、パレスチナ社会内部の亀裂や軋轢に関しては、パレスチナメディアでも取り上げられることは少ないように思う。それゆえに生活してみても初めて気づいた部分も多い。

こうした社会内部における溝の一つとして挙げられるのが難民キャンプだ。ナブルスの東隣にも、西岸地区最大の難民キャンプであるバラータキャンプを初め、他にも2つほど大きなキャンプが存在する。一度訪れたバラータキャンプの文化センターの責任者の女性によれば、同キャンプを含むナブルス市の東側は、開発が進む西



▲預言者 (ムハンマド) 生誕祭を祝う飾り付けが施されたナブルス旧市街のスーク (Khan al-Tujjar)。

側とは対照的に、市による行政サービスは行き届いておらず、道路や水道、電気などのインフラも脆弱なままだ。インフラ面以外にもキャンプ出身者の就職機会の少なさなど、主要都市に隣接しながらもこれらの難民キャンプは様々な面で周縁に追いやられている。

こうした周囲からの疎外感、PAに対する不信感などからか、近所の住民やアラブ人の友人から、PAの治安部隊とキャンプ出身者の若者との間での銃器や投石を伴った衝突の報をよく耳にする。キャンプ出身者に限らず、PA内の汚職に対する不満は多くのパレスチナ人がよく口にしていすることでもある。イスラエル対パレスチナという二項対立図式だけで見ると、いかにもパレスチナが一枚岩の存在のようにも見えるが、ハマースとファタハ間の派閥抗争や、主要都市-周辺村落-難民キャンプといったパレスチナ社会内における多層的な利益配分の構造など、社会内部に抱える問題にも改めて気づかされる瞬間がよくある。

また上記のような社会経済的な溝以外にも、現地で生活して感じたのはパレスチナ・ナショナリズムにおける少数宗派コミュニティの微妙な立場だ。

冬季休暇中にイスラエル側にあるナザレへ赴く機会があったのだが、そこで出会ったアラブ系カトリックの年配女性は終始イスラム住民への不信と嫌悪を口にしていた。ナザレはイスラエル側の町だが、アラブ系キリスト教徒が多く住む町で、イスラエル国籍を持つアラブ人の中にはパレスチナ人としてのアイデンティティを持つ者も数多い。そうした中で、同じアラブ人であるところのイスラムに対し、公然と不信と嫌悪を表すその女性の姿には驚かされた。その女性によれば、「ユダヤ人の方がよっぽどヨーロッパ的で親

切」なのだという。

この女性に限らず、西岸のナブルスでカトリックのアラブ人の家庭にホームステイしている留学生の友人によれば、彼のホストファミリーも、イスラムが圧倒的多数派であるところのパレスチナ・アラブ社会に対して、肩身の狭さを感じているようだ。彼らもまたイスラム住民への嫌悪や不信を時たま口にするがあると言う。

もちろんこうした一部の証言だけを参考にキリスト教徒住民とイスラム住民の関係を語ることはできないが、パレスチナ・ナショナリズムの中でしばしば表出するイスラームのシンボルや、ハマースへの支持の広がりなど、上記の「肩身の狭さ」を裏付けるような政治的要因がないわけではない。両者の関係を考える上で、エジプトやレバノンなど他国での状況や、近代史上アラブ系キリスト教徒がこの地域で演じた役割なども示唆的に映る。現在パレスチナ自治区に居住するキリスト教徒の人口はかなり限られているが、教育水準の高さや、欧米諸国との繋がりなど、その数以上に影響力はあるようにも思える。近年ベツレヘムにおけるクリスマスミサが、パレスチナにとって格好の政治的アピールの場ともなっているのはその一例とも言えるだろう。

キリスト教徒以外の少数宗派としては、イスラエル北部に居住するドルーズ派が挙げられる。イスラエルのドルーズ派 (ゴラン高原に居住するドルーズ派は除く) は、そのイスラエル軍との特別な関係から、西岸のパレスチナ人からは裏切り者呼ばわりされることもしばしばだ。しかし、ドルーズとイスラエルの親密な関係の背景には、過去の歴史におけるイスラムによる迫害などを考慮したドルーズの指導者



▲預言者 (ムハンマド) 生誕祭を祝う飾り付けが施されたナブルス旧市街のスーク (Khan al-Tujjar)。

の政治的判断の存在を覗かせる。

ナブルスに居住するサマリア教徒もイスラエル・パレスチナに居住する少数宗派コミュニティの一つだ。彼らは現在ナブルスを囲む山の一つであるグリズィム山の山頂部に集落を形成しているが、第一次インティファダ前まではナブルス市街に居住していた。しかし、第一次インティファダの中で増加する暴力を前に、実際にサマリア教徒に対する迫害が起こったわけではなかったが、現在の居住地へと集団で避難した。当時のことを語ってくれたサマリア教徒の司祭は、「コミュニティを守るための決断だった」と話した。現在彼らは、パレスチナ、ヨルダンのパスポートに加え、イスラエルのパスポートも所持し、事実上イスラエル政府からの保護も受けている状態だ。

少数宗派の指導者にとって「コミュニティの維持」という使命は、彼らが何らかの政治的判断を下すことを迫られた際にその判断を大きく左右する要素となる。ドルーズ派、サマリア教徒のコミュニティが下してきた判断にはそうした側面が色濃く反映されているように感じる。キリスト教諸宗派のコミュニティにも似たような心理的状況が存在していても不思議ではない。イスラエルとパレスチナの政治的対立の間で揺れる少数コミュニティの存在も、留学を通して初めて気づいた視点の一つだ。

## (2) カイロの“おしゃれクルアーン”

日本学術振興会カイロ研究連絡センター  
研究助手  
坂東和美

2015年の5-6月頃からだろうか、カイロのアズハルモスクの周辺で、これまで見なかったような色鮮やかなクルアーンが店頭で積まれているのを見かけるようになった。

カイロで通常見かけるクルアーンは、濃紺や深緑、臙脂などの暗めの地に金の箔押しで題字・装飾があしらわれていたりする重厚な雰囲気のものが多い。一方で、新しく見かけるようになったクルアーンは、表紙には彩度の高いピンクや紫・緑・



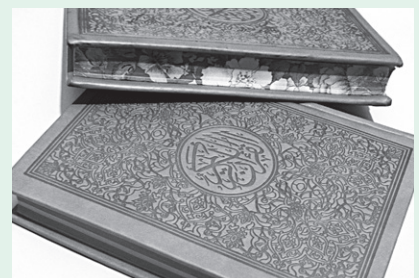
▲アズハルモスク近くの店で(上半分が従来型、下半分が“おしゃれクルアーン”)

水色などのカバーが使用され、題字や装飾は型押しされたり、金字でプリントされたりしていた。さらに、小口や天地も蛍光色が使われていたり、花模様が印刷されていたり、日本でいう虹色のグラデーションになっていたりするという非常に華やかなものだった(カラーで写真を見せられないのが残念だ)。サイズはA6~A5程度の持ち歩きは可能だが小さすぎないものがほとんどで、角やしおりに金属の飾りをつけたものもある。また、小口や天地が蛍光色になったものについては、売っている人達は「これはハンドメイド」と言っていたが、なんのことはない、手作業で蛍光マーカーで色塗りをしたもののように、少しきちんと見てみれば、のどの近くはうまく塗れず白い部分が残っているなど粗雑な部分がすぐに目について、正直なところ買う気がそがれてしまうようなものだった。その外見に比して中のページは従来型から見てそれほど大きな変化がないものが多かったが、中には主題別タフスィール付きということで本文の章句を主題別に色で塗り分けるような試みをしているものもあった。ただ、教育用に本文を主題ごとに色分けたり、あるいは特定の文字やタシュキールに色を付けたりすることに関しては決して新規の事象でなく、この数年おこなわれるようになったクルアーン出版・販売上の試みの一つでもあった。

アズハルモスク周辺を歩いていると、女の子が若い人も中年の人もこのいかにも女子受けのしそうな“おしゃれクルアーン”を手にとって見ている様子を見かけることもしばしばだった。また、地下鉄の中でローズピンクのそれを読んでいる若い女性を見かけたこともあった。

このクルアーンに関してまわりのムスリムの人たちの反応はまちまちで、「おしゃれだし、女性が好きそう。クルアーンに興味を持つ機会にもなるし良いんじゃない」という人もいれば、「これはクルアーンに対して敬意を欠いている」と顔をしかめる人もいた。ただ一方で、このタイプのクルアーン自体はじめて見る人も多いようで、見せてみると「こんなのあるの?」と驚かれることもしばしばだった。確かに、私自身もアズハル周辺以外で売られているのをまだ見たことがない。そういった点で、まだまだ局所的な販売・流行のように感じていた。しかしながら、個人的には、流行から離れたところに超然とあった(あるべきであった)クルアーンが流行の中に組み込まれ、さらには「おしゃれ」というキーワードで取捨選択される、という新しい流れがあらわれたことを大変興味深く感じていた。

同年10月後半、アズハルのイスラーム研究アカデミー下のクルアーン委員会が、カイロの若者、とくにアズハルの大学生の間で流行っているこういった「女子用クルアーン」を市場から引き上げ、かつ出版社に対して再度出版しないよう、またアカデミーが定めている「神の言葉を高め尊ぶにふさわしい形」にしたがうよう、警告を発することを決定した。また、雑誌や新聞ではないのだから、無駄に鮮やかな色や装飾を使ってクルアーンの外見を飾り立てる行為はアッラーの言葉であるクルアーンへの敬意・尊崇の念を欠くものだとし強い不快感を示した(<http://www.dotm.sr/OixMg>)。もちろん、これらのクルアーンにはアズハルのイスラーム研究アカデミーからのお墨付きを示す証明書が末尾に付けられている。知り合いの古書店兼出版社の店主から聞いたところでは、通常エジプトでクルアーンを出版する際には、出



▲“おしゃれクルアーン”



▲“おしゃれクルアーン”の内側（本文の章句を主題別で塗り分けたタイプ）

出版社は印刷前の段階で完成稿・見本を提出して、アカデミー下の委員会にて一文字一文字、一ページ一ページ誤りがないかをチェックして証明書の書類に許可印が押される。その後も、印刷・製本後に再度委員会の現物のチェックをうけ許可がおりてのち、ようやく市場に出すことができることになっている。加えて、一つの許可・一つの版で刷れる期間は決まっている、とのことだった。その中から、この「女子用クルアーン」は市場にあらわれ、一部で議論を巻き起こし、その後引き上げ警告を食らったのだった。ただ、わずかにニュースにはなったものの、それ以上の議論も特におこらず、話題としては収束してしまっただろうだった。しかし、ニュースで報じられたなかで興味深かったのは、実はこの「女子用クルアーン」は原色・反対色使いの大好きなエジプト発の試みではなかったということである。すでに、2012年にサウジアラビアでネットの掲示板や説教師の出演するテレビ番組上で同様の「色付きのクルアーン」について話題になり、同国のワクフ省から一掃命令がでていたようだ（<http://www.dotm.sr/6Kb5w>）。

11月半ばにアズハルモスク周辺を見てみると、警告が発せられた後だからか、モスク入り口前ではいかにもな“おしゃれクルアーン”は消えていた。だが、少し行くと、一時期ほどの数ではないが、その鮮やかな色は店頭でまだ見つけることができた。さらに、12月末の預言者聖誕祭のときに再度訪れると、アズハルモスクの入り口付近にも“おしゃれクルアーン”は以前と同じ勢いで戻ってきており、裏に行けばヒョウ柄の表紙のクルアーンが売られていたりするのも見つけられるのだった。数時間後同じ場所を通ると、ヒョウ柄クルアーンは店頭から消えていた。

## 6. 新刊紹介

小笠原弘幸『イスラム世界における王朝起源論の生成と変容—古典期オスマン帝国の系譜伝承をめぐって』刀水書房、2014年  
 東京大学大学院人文社会系研究科  
 アジア文化研究専攻博士課程  
 山下真吾

本書は、古典期のオスマン帝国を例にとり、王朝起源論を、王朝の系譜、始祖伝承、先行諸王朝との関係などの観点から、言説史のアプローチを用いて論じた研究である。

本書では、まず序論において問題設定、研究史や史料のまとめが行われる。問題設定では、オスマン王朝のアイデンティティに関わるものとしての王朝起源の問題に焦点が当てられる。著者によると、ローマ帝国やモンゴル帝国の例などに見られるように、オスマン朝の起源伝承は、王家の系譜を『旧約聖書』の登場人物ヤベテに遡らせる説があるなど、伝説的な色彩を帯びている。本書は、歴史的事実としての起源そのものよりも、起源を扱った言説の方に視点を移して、古典期オスマン朝における系譜意識や歴史叙述のあり方を探るものである。

また、史料を扱う際の方法論的枠組みに関して、著者は、研究史のまとめと本書の位置づけを行う。著者によれば、オスマン朝の起源を巡る研究は、1) 叙述史料の記述を史実としてそのまま受け入れるアプローチから、2) 史料批判を通じた起源の実態の探求、3) 史料叙述の脱構築、4) 叙述史料をその時代の価値観の反映として分析する立場へと至ってきたという。こうした研究史を踏まえた上で著者は、王権のもつ支配の正統性を支える要素の一つとしての血統の重要性を挙げ、先行するアラビア語やペルシア語によるムスリム歴史叙述との関係の中で起源言説を捉えるものとして本書を位置づける。

こうした序論に続き、第一部では、「四人の始祖」の標題のもとに、オスマン王朝の起源を示す系譜や伝承の展開が扱われる。著者は特に、トルコ・モンゴル系の諸集団に広く受け入れられていたオグズ伝説に基づく始祖伝承と、旧約聖書に基づく始祖伝承の二つに注目する。そしてまず、15世紀オスマン朝における、オグズ伝承に基づく王朝始祖伝承の類型と発展について検討する。著者によると、15世紀には、オグズ族の始祖とされるオグズ・ハンの息子ギユン・ハン

の息子、カユを始祖とする説が唱えられた。その一方で、オグズ・ハンの息子であるギョクを始祖とする説が併存していたという。

著者は次に、十五世紀後半以降、旧約聖書に端を発する伝承に基づく始祖伝説の発展を検討する。この系統の伝承として、まず、旧約聖書の登場人物であり、その後の諸民族の始祖となったとされるノアの息子、ヤベテを王朝の始祖とする説を紹介する。次に、同じくノアの息子であるエサウ説に言及した後、ヤベテ説と始祖エサウ説の展開を論じる。その上で著者は、既述のカユ説とエサウ説それぞれの勝利や、カユとエサウの同一視が十六世紀に起きた事、その背景や、伝統への部分的回帰の展開などについて議論する。

第二部では、「二つの王朝」の標題のもとに、オスマン朝と、それに先行する二つの王朝、すなわちセルジューク朝及びモンゴルとの間の系譜・同族意識が扱われる。著者はまず、セルジューク朝について、十五世紀のオスマン朝の歴史叙述において、同王朝との同族・婚姻関係が繰り返し主張された事を明らかにする。こうした主張は、十六世紀にはなされなくなるか、下火になり、またセルジューク朝の起源について多様な主張がなされなくなるという。また、オスマン朝建国伝説の中で、破壊者として否定的に描かれてきたモンゴルであるが、十六世紀に入ると、チンギス・ハンやガザン・ハンなどを中心として高い評価を受けられるようになる。これと並行して系譜書などにおいて、オスマン朝との同族意識が見られるようになったという。

また著者は、結論に続く補論において、オスマン王統譜の構造とその形成過程についての分析を行っている。この部分においては、オスマン朝の始祖についての諸説や、初期の系譜が記述の挿入や他の伝承との調整を経て発展していく過程を分析している。また補論二において、古典期のオスマン史書についての網羅的かつ概括的な史料解題を行っている。また付表においては、始祖伝承や他王朝との関係についての記述などにつき、各史料の記述をまとめた詳細な表が付されている。

本書は、古典期オスマン朝における起源・系譜伝承を包括的に扱った初の試みであり、是非一読すべきものである。

## 7. そのほかの便り

### (1) 駒場博物館におけるオマーン展 「Omani Corner at Komaba」の 展示入れ替えについて

2014年9月に、東京大学大学院総合文化研究科・教養学部付属の駒場博物館1階ロビー内に設置されたオマーン展「Omani Corner at Komaba」は、オマーン大使館および中東地域研究センター関係者の協力によって、一年に1、2回、若干の展示入れ替えを行います。現在、オマーン大使館参事官シーリーン・アルザッジャーリー氏の尽力により寄贈されたオマーン女性の華やかな衣装と男性の正装衣装が展示されております。

開館時間は10:00から18:00で、入場は無料です。一度訪問された方も是非またお立ち寄りください。



### (2) 日本・オマーン協会大森敬治理事長 の本センター訪問

2015年11月11日に、一般財団法人日本・オマーン協会の理事長大森敬治氏と事務局長の杉村健二氏が、本センターを訪問しました。2005年から2008年までオマーン大使を務めた大森理事長は、日本・オマーン協会設立のいきさつを説明され、現在、日本における中東・西アジア地域にかんする研究の学術的成果と、一般日本市民の間の理解に距離感があることを感じているとのことで、本センターのカブース講座における学術的成果がより平易なかたちで、一般に開かれる必要性を力説されました。今後、中東センターとしても、さまざまな機会を通じて、成果の公表と大学以外の人も含んだ幅広い発信に努めてまいります。



### (3) 齊藤貢在オマーン日本国特命全権大使の本センター訪問

2015年11月18日に、新たに在オマーン日本国特命全権大使に任命された齊藤貢大使が、オマーン着任前に、本センターを訪問し、センター長の杉田英明教授および、高橋英海教授、辻上奈美江准教授と面会しました。センター設立の経緯や、これまでの活動、今後の活動やオマーン側との協力関係まで幅広い分野に関して話し合いました。



### ●UTCMEs スタッフ紹介 (平成28年3月31日現在)

#### 〈スタッフ〉

杉田 英明 (センター長、兼務教授)  
森元 誠二 (客員教授)  
辻上 奈美江 (特任准教授)  
瀬口 美加 (事務補佐員)

長澤 榮治 (副センター長、兼務教授)  
高橋 英海 (兼務教授)  
阿部 尚史 (特任助教)

#### 〈UTCMEs 運営委員〉

杉田 英明 (委員長、大学院総合文化研究科教授)  
羽田 正 (東洋文化研究所教授)  
矢口 祐人 (大学院総合文化研究科教授)  
高橋 英海 (大学院総合文化研究科教授)

長澤 榮治 (東洋文化研究所教授)  
石田 淳 (大学院総合文化研究科教授)  
菊地 達也 (大学院人文社会系研究科准教授)

#### 〈スルタン・カブース・グローバル中東研究寄付講座運営委員〉

杉田 英明 (委員長)  
遠藤 泰生 (大学院総合文化研究科教授、グローバル地域研究機構長)  
矢口 祐人

石田 淳  
松尾 基之 (大学院総合文化研究科教授)  
高橋 英海

### ●発行者情報 UTCMEs ニュースレター Vol.8 平成28年3月31日発行

発行：東京大学大学院総合文化研究科グローバル地域研究機構中東地域研究センター (スルタン・カブース・グローバル中東研究寄付講座)  
〒153-8902 東京都目黒区駒場3-8-1 TEL：03-5465-7724 FAX：03-5454-6441  
<http://park.itc.u.tokyo.ac.jp/UTCMEs/>

印刷：JTB印刷株式会社

〒140-0004 東京都品川区南品川5-2-10 TEL：03-5715-0900 FAX：03-5715-0909